

令和4年度 学校経営計画に対する最終報告書

石川県立羽咋工業高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 生徒全員の進路実現のため、全教職員が、新学習指導要領の目的に沿ってタブレット等のICT機器を日常の学習ツールとして活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を通じて主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組むことで、学びの質を向上させる。また、資格取得を奨励し生徒の学力向上に努める。	① 思考力・表現力・コミュニケーション力の向上のため、タブレット等のICT機器を効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」を主とした公開授業・研究授業に取り組む。	1年間に実施した公開授業・研究授業等の、教員1人あたりの平均回数が A 3.0回/人 以上 B 2.7回/人 以上 C 2.4回/人 以上 D 2.4回/人 未満	教員のうち教諭・講師29名を対象に1月にアンケート調査実施された公開授業・研究授業：18回(0.6回/人) 評価：D	タブレット等を用いた公開授業・研究授業は18回実施され、教員1人当たりでは0.6回と、判定基準の2.7回に遠く及ばない結果となった。公開授業の実施計画が教員個人の判断に任されており、授業進度との兼ね合いや校務分掌・部活動の繁忙期のために公開授業の実施時期を逸した教員が少なくないことが原因だと考えられる。 次年度は、研修や公開授業を進めるためのグループ制など、授業改善を目的とした取組が活性化する方法を検討したい。
	② 学力向上を図るために、教科の宿題やレポートの出題方法と回数工夫するとともに、授業と資格取得の補習指導を通して、家庭等での自学自習する習慣を身につけさせる。	宿題・レポート・資格取得などの自学自習について A 十分取り組むことができた B おおむね取り組むことができた C あまり取り組むことができなかった D 全く取り組むことができなかった	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：61% B：35% C：3% D：1% 評価：A・B合わせて96%	A・B合わせた評価は96%と、判定基準の80%を上回り、前年度同期97%同様に高い結果となった。生徒がテストや宿題、資格取得、コンテスト等に向けて努力した結果と考えられる。ただし、別のアンケートでは「テスト期間以外の家庭学習」に取り組んでいない生徒が27%もいるということも明らかになっている。 次年度は、自学自習の習慣が確立できるように資格取得の補習の取組を強化し、社会人になってからも主体的に学び続けることができる人材を育成したい。
	③ 毎月、図書便りを発行し全教員の「お薦めの本」を紹介するとともに、「読書週間」などの読書運動を全校的にを行い、読書の習慣を身につけさせる。	朝読書週間を含む個人的な読書、授業や課題研究等の学習で、図書館の書籍を A おおいに利用した B ある程度利用した C あまり利用しなかった D 全く利用しなかった	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：37% B：18% C：24% D：21% 評価：A・Bあわせて55%	A・B合わせた評価は55%と、中間評価から14ポイント上昇して判定基準の50%を上回った。2学期に1・3年生の読書週間が実施され、特に1年生で読書週間に合わせ、クラスごとに図書館利用の時間を設けたことが理由として考えられる。 次年度も現在の判定基準を維持して取組を進める一方、「生徒によるおすすめの本」を紹介する場を増やすなど、読書や図書館を、より身近なものと感じてもらえるような取組を進めていきたい。
	④ ジュニアマイスター顕彰のゴールド特別表彰およびゴールド・シルバー・ブロンズの取得を目指し、学校全体で多くの資格・検定への挑戦意識を高めるため、積極的な奨励を行い、認定者数を増加させる。	ジュニアマイスター顕彰ゴールドおよびシルバーの認定者数が学校全体で A 60人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満	1月の認定者数を検証 認定者数：19人 評価：D	年間での認定者数は19人と、昨年同期の74人から大幅に減少し、判定基準の50人にも届かなかった。理由として「受検者数の減少」があり、その原因は、ジュニアマイスター制度の得点が高く従来から多くの生徒が受検していた「技能検定」に対する外部からの受検料補助が今年度なくなったことに加え、教員からの受検奨励が不足していたことが考えられる。 次年度は、判定基準を下方修正し、A～Dをそれぞれ10ポイント下げた現実的な目標とする一方で、資格・検定に挑戦しようとする機運が生徒の間で一層高まるよう、より組織的に資格取得を促す体制づくりに努めたい。
	⑤ インターンシップや地元企業説明会等により適切な進路選択を促すとともに、進路説明会やLHなどで進路に向けた情報提供を行なう。	各種の進路指導行事・LHや懇談会での説明や進路情報により、生徒の進路意識が A たいへん高まった B ある程度高まった C あまり変わらなかった D 全く変わらなかった	保護者対象に 12月にアンケート調査 A：27% B：51% C：7% D：0% 回答不能(よく分からない)：15% 評価：A・Bあわせて78%	A・B合わせた評価は78%と、判定基準の80%に届かなかった。15%の保護者が「回答不能(よく分からない)」と回答している。今年度の10月以降には、1年生・2年生を対象にインターンシップ・地元企業を知る会、進路説明会を行ったが、保護者に対する進路情報の提供は十分とは言えない。 次年度も現在の判断基準を継続し、まず回答不能を低減するために、段階や時期に応じた適切な進路情報が保護者に伝わるように取組を検討したい。
	⑥ 進路希望の達成のために指導の充実を図る。 基礎学力の定着を図ると共に、授業でコミュニケーション力をつけさせる工夫を行う。 外部講師による講演や面接指導、全教員による個別面談・指導を充実させる。	朝学習や日頃の学習、面接指導などにより、基礎学力やコミュニケーション力が A たいへんついた B ある程度ついた C あまりつかなかった D 全くつかなかった	3年生対象に 12月にアンケート調査 A：73% B：24% C：2% D：0% 評価：A・Bあわせて97%	A・B合わせた評価は97%と、前年度同期98%と同様に、判定基準の90%を上回った。入学時より朝学習に真摯に取り組む、3年次には就職希望者には早期より進路説明会を充実させたことや進学希望者に対する補習を6月よりほぼ毎日実施したことが奏功したものと思われる。 次年度も現在の判定基準を継続し、就職や進学に向けた指導を充実させたい。
		1回目の就職試験における内定率が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	10月末における内定率を検証 1回目の内定率 94% 評価：A	1回目の就職試験では、受験した68名のうち、94%にあたる64名が内定し、A評価の判断基準である「内定率90%以上」を上回った。今年度も県内企業からは多くの求人を頂いているところだが、県内企業への内定者は46名と就職内定者の7割を占めており、地元企業の担い手となる人材を輩出することができたと考える。 次年度も現在の判定基準を継続し、生徒の第一希望が達成できるよう、適切な指導を続けたい。
学校関係者評価委員会の評価		○資格取得の実績が極端に下がっていること背景には、生徒の向上心の低下があるのではないかと。 ○羽咋工業の特色や魅力をもっと強くPRして多くの生徒を集め、生徒たちが切磋琢磨できる環境を整える必要がある。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策		○資格取得を積極的に奨励する雰囲気を校内に作るとともに、日々の教育活動を通じて生徒の向上心を育てていきたい。 ○令和5年度に中学校の教員を対象した説明会を新たに企画している。また、ホームページの更新を活性化するなど、外部に向けた積極的なPRに努めていきたい。		

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
2 身ともに健康で逞しい(タフな)人づくりを目指し、部活動や生徒会活動の活性化に努めるとともに、規範意識を高め、いじめを見逃さない学校づくりに努める。	① 県高校総体・新人大会で団体・個人とも上位入賞を目指す、上位大会出場を目指す。	県高校総体・新人大会等で北信越以上の大会に進出した運動部の数が A 7以上 B 5以上 C 4以上 D 4未満	県総体・新人大会の結果 5つの部が北信越以上の大会に進出した。 評価：B	県総体では、各部とも健闘し、陸上競技部、卓球部、剣道部、ソフトテニス部、ヨット部の5つが北信越以上の大会に出場した。新人大会でも、剣道部、ソフトテニス部が北信越大会に出場することができた。 次年度も現在の判定基準を維持し、今年度北信越以上の大会に進出できなかった部も含めて、より一層の健闘を期待したい。
	② 文化部の重複加入を奨励し、各部の取組に生徒が積極的に活動し、より良い成果を収める。	文化部の活動と成果に A たいへん満足している B おおむね満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	文化部加入生徒対象に 12月にアンケート調査 A：67% B：29% C：4% D：0% 評価：A・B合わせて 96%	A・B合わせた評価は96%と、判定基準の80%を上回り、前年度同期99%と同様に高い結果となった。徐々に新型コロナウイルス感染症以前のような活動ができるようになってきており、生徒は前向きに取り組んでいる。 次年度も現在の判定基準を維持し、現状に満足していない生徒も満足できるような活動を生徒とともに考えていきたい。
	③ 生徒会を中心にして行事への参画意識を高め、生徒が自主的に活動する行事にする。	生徒会行事に A たいへん満足している B おおむね満足している C あまり満足していない D 全く満足していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：60% B：36% C：4% D：1% 評価：A・B合わせて 96%	A・B合わせた評価は96%と、判定基準の85%を上回り、前年度同期の98%と同様に高い結果となった。新型コロナウイルス感染症対策を行いながら、伝統の学校行事が少しずつ例年どおりの形で行えるようになってきた結果だと考えられる。 次年度も現在の判定基準を維持し、生徒がより満足して参加できるような行事を生徒主導で運営できるように目指していきたい。
	④ 規則やマナーを守り、思いやりの心を育むため、生徒への声かけや観察を行い、生徒との相互理解を深め、規範意識といじめ防止の意識を高める。	本校の教育活動や規範意識向上の取組により、規範意識やいじめ防止の意識が A 十分身についた B 少し身についた C あまり身につけていない D 全く身につけていない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：84% B：15% C：1% D：0% 評価：A・B合わせて 99%	A・B合わせた評価は99%と、判定基準の90%を上回り、前年度同期99%と同様に高い数字となった。「朝の挨拶運動」や「校内におけるスマートフォン(携帯電話)の使用禁止」等の指導の取組に加えて、今年度は規範意識週間での全体発表会を行ったことによって、生徒の規範意識やいじめ防止の意識が高まったものと考えられる。 次年度も現在の判定基準を継続するとともに、これらの取組を充実させて規範意識の高い生徒を育てていきたい。
	⑤ 保健だよりや掲示物、集会、SH等を利用して、生徒の心身の健康管理についての意識の高揚をはかる。	自分自身の心と体の健康管理について A 常に意識している B ある程度意識している C あまり意識していない D 全く意識していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：65% B：28% C：7% D：0% 評価：A・B合わせて 93%	A・B合わせた評価は93%と、判定基準の80%を上回った。前年度同期94%と比較して1ポイント下降したが、「A(常に意識している)」と回答した生徒の割合は前年度の52%から13ポイントも増加した。新型コロナウイルス感染症の感染者数の増加に伴い、感染症対策の必要性が高まったことが要因と考える。 次年度も現在の判定基準を維持し、生徒が健康的な行動習慣を確立し、自らの健康管理を行えるよう、「保健だより」や掲示物、学校行事等での指導を通して支援していきたい。
3 社会貢献や環境に対する意識を高めるため、工業学習成果の提供やボランティア活動等を積極的にを行い、地域社会との連携を深める。	① 社会に貢献することの大切さや必要性を認識するために、地域ボランティア活動や校外での一日一善運動を推奨する。	地域ボランティア活動や一日一善運動を通して社会貢献の大切さを A 十分理解している B ある程度理解している C あまり理解していない D 全く理解していない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：74% B：24% C：2% D：0% 評価：A・B合わせて 98%	A・B合わせた評価は98%と、判定基準の85%を上回り、前年度同期98%と同じく高い数字となった。日頃の「一日一善運動」やボランティア清掃などを通して、社会貢献の大切さを十分理解した結果であると確認できる。 次年度は、判定基準を5ポイント高めて「A・B合わせて90%以上」とし、「一日一善運動」やボランティア清掃などを通して、社会貢献の大切さを訴えていきたい。
	② 環境保全のこれまでの取組を向上させ、ゴミ分別や環境保全が正しく行われているかを評価し、環境に対する意識の向上を目指す。	環境保全活動(ゴミの分別・節水・節電等)に A 常に意識して取り組んでいる B ある程度取り組んでいる C あまり取り組んでいない D 全く取り組んでいない	生徒対象に 12月にアンケート調査 A：61% B：34% C：5% D：0% 評価：A・B合わせて 95%	A・B合わせた評価は95%と、判定基準の80%を上回ったが、前年度同期94%と比較して1ポイント高くなった。しかし、実際には燃えるゴミにペットボトルや空き缶が混在しているような状況や電気・エアコンの消し忘れも一部において見られる。 次年度も現在の判定基準を維持し取組を継続する一方、環境委員会の生徒を中心に、ゴミを分別しやすい環境づくりを進めたり、節水・節電についてポスター掲示等で啓発活動を行ったことで、生徒の意識をより高め実践につなげていきたい。
4 教職員相互の業務点検による平準化で業務を分担するとともに、協力体制を構築し、更なる働き方改革を推進する。	① 校務分掌ごとに業務内容を点検して改善に努めるとともに、協力体制を構築して組織的な業務の平準化を進める。	自らが担当する業務を改善するとともに他の職員が担当する業務に協力することで、業務の平準化に A 十分努力している B ある程度努力している C あまり努力していない D 全く努力していない	教員対象に 12月にアンケート調査 A：23% B：59% C：18% D：0% 評価：A・B合わせて 82%	A・B合わせた評価は82%と、中間評価の74%から8ポイント増加して判定基準の70%を上回った。また、前年度同期84%とほぼ同様の数字である。中間評価以降、各課が早い段階で各行事の実施計画や職員の業務分担案を作成し、事前に綿密な連絡を取り合ったことが数値を向上させた要因の一つに挙げられる。 次年度も現在の判定基準を維持し、職員間の連絡ツール等を活用して紙媒体の配付物を削減する等、各課・教科を横断的した業務改善を地道に行い、働き方改革を進めたい。
学校関係者評価委員会の評価		○部活動が以前に比べて元気がなくなっている。部活動の強い学校というのは大きな魅力であるので、ぜひ頑張って成果をあげてほしい。 ○規範意識を高める取組を続け、エチケットやマナーを身に付けた生徒を育ててほしい。		
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善策		○部活動は本校の人間教育の柱の一つであり、積極的に奨励する雰囲気を作ってきたい。 ○規範意識の向上に引き続き努め、一日一善や地域貢献を実践しようとする生徒を育成していきたい。		